

## プーチン発言：言葉の端に真実は現れる

Greatchain

June 16, 2022

プーチン大統領の発言として、「アメリカは自らを〈神の使い〉とみなし、無責任に利益を追求している」と言ったと、きょうの「Sputnik 日本」に出ている。

これはほんの片言だが、この世界のあり方がどうなっているかを的確に言い表す名言と言ってよいだろう。同時にそれはプーチンの人柄をよく表している。アメリカは、何か途方もない勘違いをし、それが正しいと信じ、それを世界各国に、もちろん日本にも、当然のように押し付けようとしている。それは確信犯といってよいもので、自分自身の犯罪が見えていないのだが、それをプーチン大統領は、事を荒立てないように「自らを〈神のみ使い〉とみなし…」と、うまく言っている。確かにこれはアメリカの信仰として存在し、ある意味で、崇高な自覚である。

これを別の的確な言葉で、「**アメリカ例外主義**」American Exceptionalism と呼ぶこともできる。アメリカだけは特権的に許されている。何を許されるか？ 少々国際的に違法であることを、密かにやっても許される、ということである。これは特に、(現在 99 歳と言われる?) キッシンジャーの語録に、明瞭に言われている。それがあまりにも堂々としているので、世界はこれを信用してしまった。プーチンのロシアだけが、それは間違いであると主張し、その時代は終わった、一極集中 (unipolarism) の時代ではなくなった、とたしなめるように言っている。決して不正に対して怒るという言い方ではない。

日本の主流メディアや現政府は、この「アメリカ例外主義」を、模範国のように受け入れている。ロシアのウクライナ侵攻を、その困難な事情にもかかわらず、ただ「国際的に許されない」と主張するのは、「アメリカ例外主義」原則に照らして許されない、ということであろう。先日、バイデンが来日したとき、彼はむしろ、わが政府の自信に、気圧されたかのようなであった。(これは、現首相から「ロシアの核兵器に用心せよ」と忠告された、駐日米大使の場合も同じだった。)

このアメリカの傲慢な、暗黙の「神のみ使い」思想は、わが国への原爆投下の理由付けにもなっていて、日本国民はその影響で、我々は自分の「過ちを繰り返さない」と誓って、アメリカを認める形になっていることを、知るべきである。

この「言葉の端に出る」言い方は、予想に反して、強い言い方よりも強力に心に残る場合がある。数年も前のことだが、ある新聞のコラム記事が、ロシアを非難して「**自分が大国であることを笠に着て…**」と言った、その言い方を、私はいつまでも忘れることができない。なぜ、そう思うか？ まず、ロシアは、常に自国の軍事力の強化を怠らないが、それは現に証明されたように、その必要を常に迫られているからであって、自分の国力を「笠に着て」横暴で横柄な態度を取ったことは、これまで一度もない。逆に、アメリカ側がどんな横暴な態度に出ても、相手に対して「パートナーとして協力し合う」という姿勢を崩したことがない。

これを初めて破ったのが、今度の、玄関先に兵器を突き付けられ、暴力団のように脅された結果、他に手段を失くして起こした、ウクライナ侵攻である。

もう一つは、これを言う新聞社が、アメリカ例外主義の信者であることを、白状していることである。彼らは、ロシアに対して「アメリカ様と肩を並べるつもりか、生意気な奴！」と言っているようなもので、我々はただ、恥ずかしさに恥じ入るのみである。

もう一つ、同じところに載っていたニュースで、同じくらい恥ずかしい話がある。ある62歳の日本人男性が、藁人形を作り、プーチン大統領の写真と共に、大きな神社のご神木に、釘を打ち付けていたという。これを他の場所でもやっていたので、警察は彼を逮捕したという。これは何ともやりきれない話で、この男性は、ひよっとしたら、ひそかな善行として、日本あるいは世界のために、この無償の行動を行っていたとも考えられる。この呪いの行為に効力があるのかないのか、逮捕が正しいのかどうかも、わからない。ただ普通これは、恥ずべき無知かつ迷信として嘲笑はされるだろう。だが問題は、たとえ人は、ここまでにはやらないとしても、この行為に密かに拍手を送る、単純な人々が、かなり多いのではないかと思われる。

そして、その行動が何に影響を受けたかといえば、それは、一点の疑いも迷いないかのようになり、プーチンを「悪魔化」し、バイデン政権を無条件に支持する、わが国の（多数を占める？）政治家と主流メディアによって、大きく動かされたものであることは間違いないであろう。

バイデン（とその政権）は、彼が「自分はサタンの生まれ変わりと言われても平気だ」と言った通り、サタンの援助を頼みとして、ほとんど自分を支持する者がいないアメリカ人

に、呪詛の言葉を放っている。そして彼の周囲には、アメリカを滅ぼすための魔女・魔術師たちが巢食っているであろう。これは仮想にすぎないが、もしわが国にも、この終末期に、本気でわが国の滅亡を願う、「丑の刻参り」のような連中が大勢いるとしたら、我々の戦法は霊的なものでなければならず、この男を笑って片づけることはできなくなる。無神論・唯物論というものを主張する人々は、少なくなった。私は神罰というものは信じないが、「神の怒り」は信ずる。これが今、世界中で異常な現象として起こっている。